

ヒロインたちの悲劇

凌辱の宴は始まったばかり...

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

presented by

STUDIO WALTZ

ヒロインたちの悲劇

凌辱の宴は始まったばかり…

ラクス・クライン 機動戦士ガンダムSEED他 … 3

マリュー・ラミアス 機動戦士ガンダムSEED他 … 7

天津亜衣 淫獣聖戦 … 8

天津麻衣 淫獣聖戦 … 9

セーニヤ ドラクエ11 … 10

ジュディ ブラック・エンジェルズ … 14

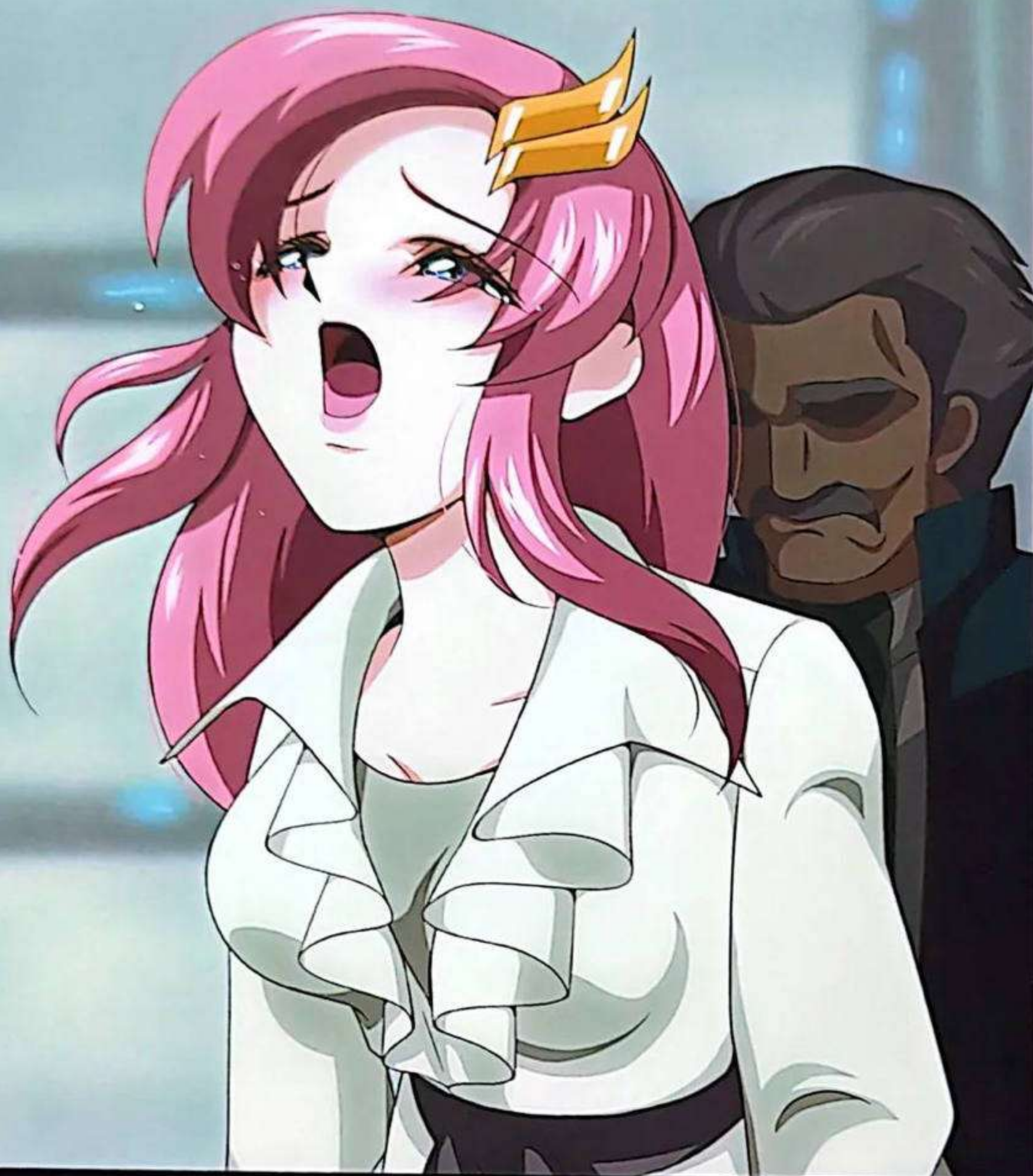
甘露寺蜜璃 鬼滅の刃 … 16

ナウシカ 風の谷のナウシカ … 18

春麗 ストII … 20

プラントとの良好な関係を

損なう訳にはいかない……



各国首脳との会議の時間が迫っている。

その控室にコンパス総裁のラクスは一人悲痛な面持ちで佇んでいた。

やがて、ある男が入って来た。

「今夜かね、ヤマト准将が戻ってくるのは？」
プラント最高評議会議長ラメントである。

穏健派とは名ばかりで、その実態は何人もの女を食い物にしてきた悪魔のような男だった。

「彼の事は言わないで下さい……」

ラクスは一度この男のワナにはまり、犯されていた。以来、その映像をネタに事あるごとに肉体関係を強いられている。

（……ああ、本当に耐えるしかないというの？）
そんなラクスの想いとは無関係にラメントの勃
起したペニスが後ろから入ってくる。

「くっくっく……ああ……」

もう何度も貫かれているとは言え、この異物感、
悪感、慣れるというようなものではない。

愛するキラ以外の男でイクなどという「こと」があった。てはならないとラクスは強く思っていた。

だが、それを打ち破られた時の絶頂は凄まじい。耐えきれずラクスの口から甘い悲鳴が漏れる。

「ひゅっ……はあぁ……」

ラメントは激しいピストンの末、のたつぷりとして最後の一滴までラクスの中に注ぎ込んだ。

会心の射精を終えたラメントが衣服を整えている。「今夜、たぷりかわいがってもらった。彼にな」太ももの内側を大量の精液が滴り落ちてゆく。尻の震えが止まらない。

ラクスは唇を噛んで、涙を堪えるしかなかった。

オルフェに犯されるラクス アルテミス要塞

入れられたシヨツクも治まらぬうちに、ラクスは理解した。
セックスの相性がいいなどという生易しいものではなかった。
無理もない。

遺伝子レベルでそのように設計されている二人なのである。
敗北の予感にラクスは戦慄した。

「ハアハア……うっ……く」

ラクスは実によく耐えた。

しかし、全身を絶え間なく襲うこの快楽に、抗い続ける
ことはラクスといえども困難であった。

やがてその小さな口からは弱々しい女の声が漏れ始めた。

マリュー・ラミアスの選択

クルーゼ隊の猛追を振り切って地球に降下したアーケエンジェルだが、今度はザフトの英雄バルトフェルドと遭遇してしまう。
再び苦戦を強いられるアーケエンジェル。

そんな中、ザフト勢力圏であるにもかかわらず水と食料、燃料、武装の補給をも確約する武器商人アル・ジャイリーが現れた。

彼の要求は実にシンプルだった。

法外な金額、そしてマリュー・ラミアスだった。

ラミアスには時間も選択の余地も無かった。

（私が……一度我慢しさえすれば……）

だが、その選択はやはり間違이었다とラミアスはその身体で知ることとなる。

飢えた男たちがラミアスをただの一度で開放するはずがなかった。

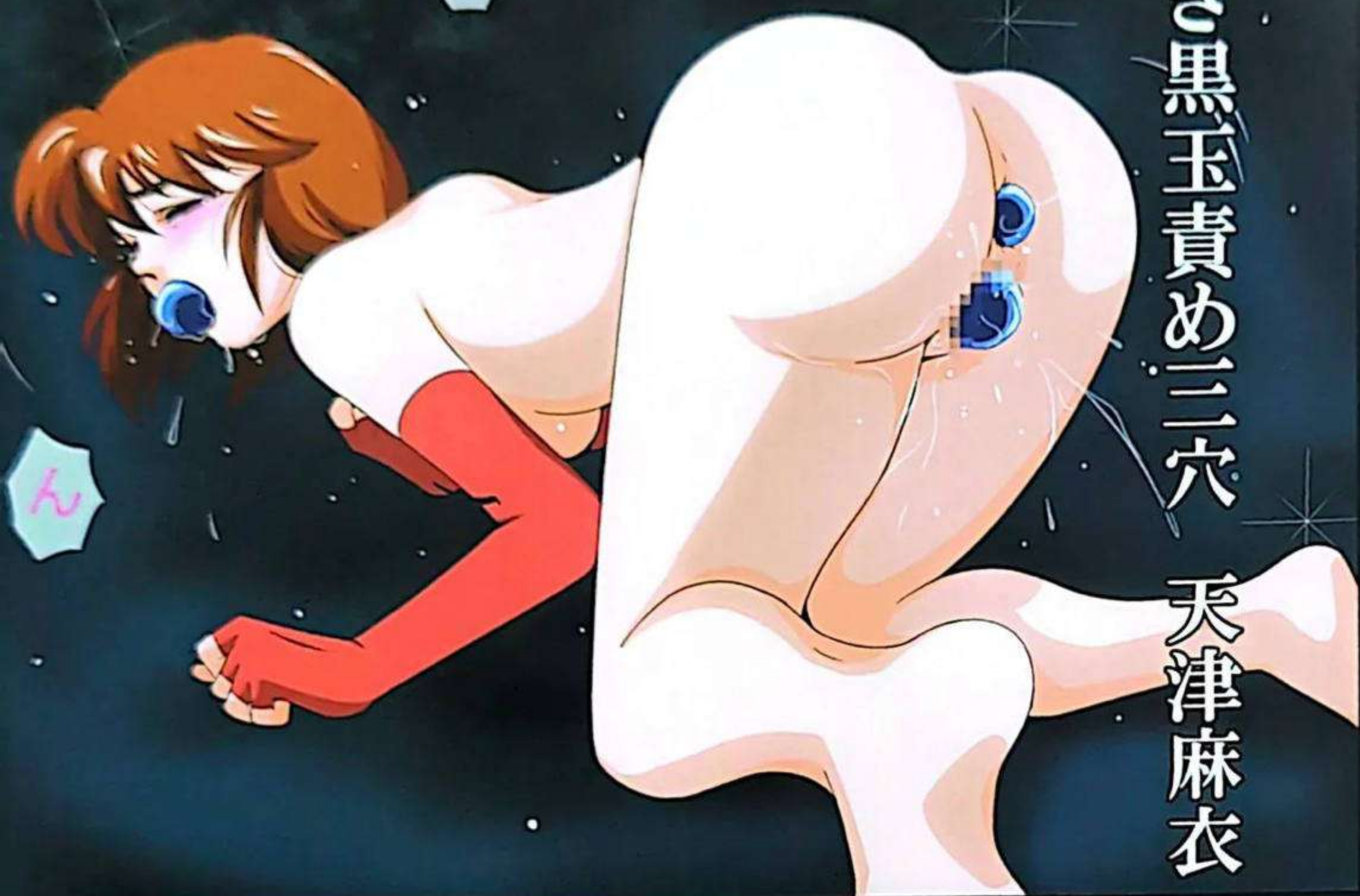
羽衣の天女、散る……

あ

ああ

かつて二度、亜衣の性器に亀頭を擦りつけておきながら、純潔を奪うに至らなかった松笠法師。ついに自らの肉棒で亜衣の秘肉を貫いた。溜まりに溜まった欲望を解き放つ時が来たのだ。「……覚悟はよいか？ 亜衣よ」

百泣き黒玉責め三穴 天津麻衣



女体の中に入った黒玉は挿入されたペニス、正確には亀頭と同じ動きをする。

麻衣の口、膣、アナルにねじ込まれた黒玉はそれぞれ淫らの波動を放ちながら柔肉をえぐり前後に動き始めた。

「んん……んっ！んんっ！」

はじめは黒玉から逃れるために振られていた尻もいつしか黒玉を味わうかのような動きに変わっていた。

「こ、こんな……ああ、おかしくなっちゃった」
麻衣は口を犯す黒玉に舌を絡めた。

ペニスならば裏筋にあたる部分であろうか。

（私……なんて、いやらしい事を……）

麻衣は興奮した。

膣がキュッと締まる。

それが膣内の黒玉の存在を際立たせ、また新しい快感を生んだ。

（はっう！）

麻衣はさらに尻を振って悶えた。

ロウとセーニヤ ドウルダ郷にて (ドラクエ11)

世界崩壊後、散り散りになった仲間を探し求めた勇者はグレイグ、セーニヤと再会を果たした。

その後、ドウルダ郷でようやくロウを見つけた一行であったが、ロウは見る影もなくやせ細り、限りなく死に近い状態であった。

大僧正サンポは言った。

「ロウ殿の魂を呼び戻すのはロウ殿自身のこの世への執着でしょう」

一行は困惑した。ロウがそこまで求めるものとは何なのか、分からなかった。

その夜、セーニヤは夢を見た。夢にはロウが現れた。

(ウシが望むものが分かるかね? セーニヤ)

まさに心当たりのあったセーニヤはギクリとした。

それだけ言つてロウは消えてしまった。

(まさか……そんな……)

次の日の夜、セーニヤは人目を忍んでロウのいる霊廟を訪れた。

誰もいない事を念入りに確認すると、セーニヤは観念したように目を閉じ、ゆっくりとロウの前にひざまずいた。

セーニヤは一度口でロウを慰めたことがあった。

懇願の限りを尽くされ、なし崩し的に、だった。

(本当にこれっきり……です)

ロウの願いとはこれに違いなかった。

(ああ、どうしてもしなければならぬの?)

いざとなるとそう簡単に踏み切れるものではない。

しかし、今、ロウの魂をこの世に戻すことができる

のは自分だろうと思う。

セーニヤが悲壮な決意を固めるのにそう時間はか

からなかった。

干からびたペニスにセーニヤは顔を近づけた。

(はやくしないと……誰か来てしまう)

セーニヤは以前したように唾液をたっぷりと含んだ唇でキスをした。

チュチュチュ

何度もキスを繰り返してから先端を口に含んだ。

唇と舌を柔らかく使って亀頭をあやしてみる。

「んん……んん……んん……」

セーニヤの唾液がしみ込んでいるのか、口の中でペ

ニスはみるみる本来の肉感を取り戻していった。

(……大きくなってきた)

セーニヤは頬を染め、口腔奉仕を続けた。

淫らな水音が響く。

現金なことにロウはペニスのみ元の姿に戻った。

(もう魂は……戻ったという「ん」と?)

安心して口を放そうとしたセーニヤだったが、その

動きはロウによって阻止された。

(え!?)

セーニヤの頭に添えられたロウの手にはほとんど力が入っていない。

(も……もう少し……頼……む……)

ロウの口に動きはない。

ほとんど聞き取れない声であった。



こういう時、セーニヤの温厚で従順な性格はアタとなる。

セーニヤは言われるがまま素直に従った。

唇と舌を優しく絡ませ、再び顔を前後に動かし始めた。

「ん……ん……ふうん」

苦し気な息遣いが続く。

「うう……あ……おお！」

やがてロウは醜く呻きながらセーニヤの口の中に精を放った。

「んっ……ん……ふ……ゴク」

セーニヤは身体をくねらせつつ、喉を鳴らして大量に出される精液を飲み込んでいった。

「ゴク……ん……ゴク」

唾液とともに濃厚な精液が食道を垂れ落ちてゆく。

その感覚にセーニヤは震えた。

全て飲み終えて、ようやくセーニヤはロウのペニスから口を離した。

射精を終えてもロウのイチモツは衰えなかった。

(ウソ……そんな……)

ロウは枯れ枝のようにやせ細った腕でセーニヤを後ろから抱きすくめた。

「な……何ですか？ロウ様！」

無理に振り払うと、すぐに折れてしまいそうな細い腕だった。

それがスキになった。

そのまま、後ろからロングスカートを跳ね上げられる。

「やめて下さい！これ以上は……ダメです！」

熱いペニスが尻の間に押し付けられた。

その瞬間に双方に濡れた感触が伝わる。

「いやっ！」

セーニヤは頬を染めて、股間を押さえた。

ロウは狂喜して、ショーツの上から腰を動かし始めた。

「ロウ様！待ってーホントにー私は……」

セーニヤはあわれなほどに狼狽した。

「私は、勇者様をお慕いしております！祖父であるあなた様と……こういう関係に……なることはできません……あああつー！」

ショーツのクロッチの部分がめくれ、横からヌルリとペニスが入ってきた。

一気に膣の半ばまでねじ込まれる。

「ああ、そんな……なんてこと……」

ロウは涙目で訴えるセーニヤの尻をグイと引き寄せた。

「あああああー！」

すっかり濡れてほぐれていた肉路はロウの肉棒を容易く受け入れてしまった。

「ああ……どうしよう……ああ……」

絶望するセーニヤを尻目にロウはピストンを開始した。

身体ごと揺さぶられながら、セーニヤはなんとかロウのペニスから逃れようともがいた。が、上手くいかない。

「可、ロウ……様……ああんー！」

逆にロウの動きはその強度を増していった。

「も……もう、私……」

ブラック・エンジェルス ジュディの敗北

新政府の豪華客船に乗り込んだジュディだったが
そこで遭遇したホワイトエンジェルス童夢に全く
歯が立たず、念動力で壁に磔にされてしまう。

「うう……く……」

童夢は煽情的に突き出されたジュディの胸をたっ
ぷりと揉みしだいた。

「ウリウリウリウリ〜」

身動きがとれないジュディは耐えるしかない。

「うう……く……」

乳首も探り当てられ、指先で弄ばれた。

クリクリクリクリ クリクリクリクリ

「く……」

童夢は震えるジュディの胸元に手をかけた。

「ウウウ……オレはなあ、ドス黒い乳首ってヤツが

どうにも許せなくな……」

「どうせ、毎晩、男のブラックエンジェルスどもに
揉まれまぐってるんだらう……黒かったらよ、
即、首はねるぜ……」





間髪を入れずジュディの迷彩服が引き裂かれた。
美乳が童夢の目の前で跳ねまわる。

「ほっほおーうーきれいなピンク色じゃねえか！」
童夢は狂喜して乳首にむしゃぶりついた。

乳房全体をほおばり、その中で舌を激しく蠢かせた。

「うあああー！」

やがてジュディの乳房を翳っていた手が下半身へと移動し、スポンとショーツが一気に引きずり降ろされた。

股を閉じることもままならないジュディは丸出しの性器を童夢に晒している。

「たっぷりかわいがってやるからな！もう通常のセックスには戻れねえほどになー！」

童夢がこれ見よがしに舌を垂らした。

20センチ以上はあるだろうか。

（な……ムリよ……そんなの……）

蠢く舌先にジュディは生唾を飲み込んだ。

無限城

甘露寺蜜璃の悲劇

「鳴女よー!」

無惨の声が響く。

「猥褻座に犯されている女の姿を他の柱どもにも見せてやるのだ!」

べーん!べーん!

無限城内の歪んだ空間のいたる所に甘露寺蜜璃の姿が大きく映し出された。

「何だ、これは!」

柱たちも驚きを禁じ得ない。

唯一人、他の柱とは異なる反応をした者がいた。

伊黒小芭内である。

空間に映し出される映像を原理さえ不明のまま、真つ二つに叩き切ったのである。

「許さぬー!」



うあああ

あああ

はああん

「この時の伊黒は常軌を逸した戦闘能力を発揮した。しかし、その想いは届かない。映像の中の蜜璃は悶え、あえぎ、かつて味わったことのない責め苦に翻弄をわづらった。」

（伊黒さん……伊黒さん！）

蜜璃は心の中で詫び続けた。

果てなく続く快樂の渦。

蜜璃の意思に反して、彼女の身体は二歩ずつ確実に絶頂へと昇り詰めようとしていた。

ナウシカ ペジテにて

腐海の底から奇跡的に生還したナウシカとアスベル。
やっとの思いでペジテにたどり着いたものの、ペジテ
はすでに壊滅していた。
アスベルは絶望的な声を漏らす。
「これじゃ、再建もできない……」
そこにわずかな生き残りを乗せたペジテの輸送艦ブ
リッグが飛来した。

二人が喜んだのもつかの間。
ブリッグ艦内でアスベルは拘束、ナウシカは
殺気だった男たちに激しく犯されてしまう。



入れ替わり立ち替わり男たちは監禁部屋を訪れた。
その全員がナウシカの若い身体を味わい、胎内に濃
厚な精を放っていったのである。
やがて抵抗する体力も尽きたのか、監禁部屋から
は女っぽい媚声が漏れ始めた。





春麗、無残 対バルログ戦

「その美しい肌を晒しても戦い続けられますか!？」

バルログの一撃が春麗の胸元を引き裂いた瞬間から闘技場の雰囲気が一変した。

「くっ……」

春麗の頬が赤く染まる。

20台を超える中継カメラがわずかにこぼれたピンクの乳首を追いかけて、スクリーンに大映しとなった。下品な歓声が巻き起こる。

観客たちはこれが目的だったと言っている。

春麗はそれでもよく戦った。

跳ねまわる右胸を懸命に隠しつつ、左手一本でバルログと互角に渡り合っているのだ。

「しかし、ここまではです!」

バルログは十分な余裕をもって致命の一撃を放った。



「ア！」
春麗は首への一撃を予感した。

しかし、狙われたのは首ではなく左手首だった。
バルログの長い鉤爪と金網と絡み合い、動かそう
としてもビクともしない。

春麗は戦慄した。

「ラフ……」

バルログは春麗の右腕をつかみ、ゆっくりと力を
込めた。

「ぐっぐっぐっ……」

単純な膂力ではバルログにはかなわない。

春麗のわずかに汗ばんだ右乳が晒されてゆく。
疲労と羞恥で上下に激しく動く乳房にバルログ
が顔を近づけた。

「や……やめ……はうっっ！」

バルログは舌先で乳輪を丁寧に舐めなぞり、乳首
を好き放題にいばんだ。

「ああ……くっくっ……」

強い女が泣いて許しを請うまで徹底的に凌辱する。
狂乱の宴の始まりである。



語られることのなかった

悲劇のヒロインたちの物語

戦いに敗れた彼女らを

待ち受ける過酷な運命とは...

presented by

STUDIO WALTZ